

64頁トシテ

千部  
百三  
外十  
五十

THE PROVINCIAL CULTURE

# 郷土文化

創刊號

郷土社發行

大正十二年十二月廿九日納本  
大正十二年一月一日發行 (毎月一回)

第一卷 第一輯



# 謹賀新年

「郷土文化」の創刊を祝し

民衆の健康を祈る

大正十二年一月一日

福島縣平町田町

内外科  
耳鼻喉科  
花柳病科  
レントゲン科

## 赤心堂病院

電話四七五番

### ◆入院隨意

(貧患者は理由を調査したる上施療す)

ドクター  
メヂカル  
日本醫學士 柳澤篤義  
橋修理

# 謹賀新年

日本人同胞の健康を祈り

「郷土文化」の創刊を祝す

大正十二年一月一日

本社の信仰と勞資渾一の實行

從來の礦業制度にては、勞資兩間をして健全に、自他の秩序を保つことを得ず、平等なる相對の人格の上に立ちて正當なる權利を尊重することは、言ふに易くして實際に行ふを得ざるは現在の勞資狀態である。

茲に本社は絶大なる日蓮主義を行戴し、社員一齊に信仰を奉持し、全礦の坑業夫にまでこれらの聖感を頌ち與へ、以て相共に自制互讓の精神を統一し、産業の發展及地方文化の爲に、國家社會の協調の爲めに、現今勞資問題に魁して、聊か有効の實行を見んことを期す。

福島縣勿來驛管内

王城炭礦株式會社

川部礦業所

所長 川合 晃

# 謹賀新年

「郷土文化」の創刊を祝し

民衆の健康を祈る

大正十二年一月一日

福島縣平町田町

外科科  
内科科  
耳鼻咽喉科科  
花柳病科科  
レントゲン科科

## 赤心堂病院

電話四七五番

### ◆入院隨意

貧患者は理由を調査したる上施設す

メデクター 柳 澤 篤 義  
日本醫學士 橋 修 理

# 謹賀新年

日本人同胞の健康を祈り

『郷土文化』の創刊を祝す

大正十二年一月一日

本社の信仰と勞資渾一の實行

從來の礦業制度にては、勞資兩間をして健全に、自他の秩序を保つことを得ず、平等なる相對の人格の上に立ちて正當なる權利を尊重することは、言ふに易くして實際に行ふを得ざるは現在の勞資状態である。

茲に本社は絶大なる日蓮主義を行戴し、社員一齊に信仰を奉持し、全礦の坑業夫にまでこれらの聖感を頌ち與へ、以て相共に自相互讓の精神を統一し、産業の發展及地方文化の爲に、國家社會の協調の爲めに、現今勞資問題に對して、聊か有効の實行を見んことを期す。

福島縣勿來驛管内

王城炭礦株式會社  
川部礦業所  
所長 川 合 晃

# 謹賀新年

併て「郷土文化」の創刊を祝す

大正十二年一月一日

福島縣石城郡川部村

加 茂 元 吉

旭日生命保險株式會社勿來代理店

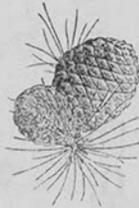
# 謹賀新年

日一月一

## 公認東北入口の灘！

### 銘酒「白山」

芳烈優秀なる郷土酒の代表！！



- 回 關東々北境界勿來關嶺下を流る鮫川源泉を以て、醸造したる當家秘藏の「白山」は、普く現代人に適することう強信す。
- 回 大正九年十二月二日第五回奥羽聯合會清酒品評會にて、總裁正五位道岡秀彦氏より、第叁等賞を受く。其他各所の審査會に提出每會賞牌を得。
- 回 お試飲樽特價提供、特等一斗一五圓上等一斗一三圓其他多量契約者には御相談に應ず、荷造は完全、御一報次第直送す。

福島縣石城郡川部村植田驛下

## 白山

醸造元 芳賀 嘉右衛門

醸造監督主任

大藏省醸造試驗所  
第九回卒業生

芳賀 嘉吉

(商號中屋)「電器ハカ」

謹賀新年

一月元日

Higher-Tailor.

S.M

高等及普通洋服一式

福島縣平町

高島屋高等洋服店

店主 諸根正二

特約賣品

キリンビール  
各種サイダー  
和洋酒類一式問屋

銘酒「白山」發賣元

茨城縣多賀郡平潟町

芳賀三郎商店

電話「一番電聲」八カ



公告

一 同人制に就て

最近都市の大雜誌でさい廢刊する折柄、田舎から雜誌を出版する事は、一寸暴慢の態度ですが、本社は固い強信の下に態と地方から打て出ました。殊に近頃の大雜誌は尤大な廣告心理だけで。小雜誌や田舎刊行物を蹴散して獨り發揮してゐますが、其實永遠性のものは一冊もありません、此等の中に敢て廣告も出來ず而も超然として権罷て行くには、所謂確した同士の組織とするのが至當と決定しました。故に本社の主張と目的とに協力して日本的に根本の郷土へ奉仕したい方は、加盟して下さい、詳しい内容は何時でも應答します。

二 支部社員囑托

本誌代を半年以上前納したる方が同地に拾名を越した際は支部を設け、同時に其等の事項を委任して、社員として特別の待遇をします、希望者は至急申込み下さい支部には年二回位の會合を期し講演及研究書庫の機關を計ります。

三 編輯員推薦

本社の事業を實際に當務したい方及將來健全なチャナリストとして立ちたい人に、本誌の編輯を一部責任附にて委せます。  
資格は本人の絶大な個性——才分を具有した方なれば、強ち學校や片書の有無は眼中におきませんが、豫め本社に於て充分詮衡の上登用します、志望者は至急年齢及男女に不拘申込み下さい。

大正十二年一月一日

郷土社編輯局

環境を超越せよ

村川潤造

本誌の印刷中私は校正の傍ら當日の新聞を見てゐると、新刊紹介のところに、水戸より「郷土」藝術雑誌創刊！といふ記事を目撃した時は、思はず茫然自失した。尤もこれは山村暮鳥氏や野口雨情氏横瀬夜雨氏たちの地方純文藝的のものである。實は吾々からも「郷土」といふ名前の雑誌をやはり昨年十一月に出版の決定で、已に原稿を先方へ送つて在つたのが、不埒！にも出来る筈の「郷土」が着手もせず無責任な田舎印刷屋のために残念ながら止むなく原稿を引取つて別の所にて、正月前にもかゝはらず無理に相談して出版することにした次第である。で、いくら私達の出す雑誌を、先めから「郷土」と命名して最早半分も印刷したまじしても、後産の「郷土」が偶然にも吾々のより一歩早く社會に生れ出てた以上は、同名を附けるのも可笑なもので、亦先方へ命名の珍沙汰を交渉するのも、前例にないゆゑ、痛苦ながら已朝を全然破棄して「郷土文化」と改名することに漸く落ち着けて、本社名は元のまゝにした。こんなことは何も名前だけの先取運動であつて論議する程の値のないものであり、殊に吾々の雑誌は、現今無暗にある地方青年文學雑誌や都市の文化主義雑誌の加し示威的プロケラム式内容の普及なものとは全然異隔した、もつと奥深い創造的の雑誌であるから、徒に誌名が重複したまじても或は同類の命名にしたまゝで、彼我互に適つたことばはない、が不知して同姓同名が近くの所に暗合したまじは奇感である。其際、吾々の雑誌を出すことに定まつてから、方々の先輩や知名の人に原稿を要求したら、随分思ひ切つた地方政策論から郷土文化運動田園藝術乃至村制の改造、等に關する一般常流のものがおびただしく莫り光つたが、此等を直ぐに吾々の領土へ導入させることは、餘りに無法であつたが有難く容れ載せることが許さなかつた。

那是、若いくせにこんな暴慢な恣断な行爲に出たか？ 吾々への境界は近代そのまゝの表現を移植することは望まない、否社會文化の混成をそのまゝに迎へることは出来ない、さゆて現實運動を頑固的に排他しないが、一概にして言ひば吾々は幾々とした郷土の原人の生活を廻り當る絶對な基調からのムーブメントであつてそこに至遠なイッセンヌが包含されて來てゐる所以であるからだ。

そんな理で、失禮ながら大方の原稿は返展した、夫等は何時でも都市の雑誌に見るべきもの、從て知名をよこさずする雑誌凡讀者の自由意識に任すのみである。

(一一一七本誌再版校正の日)

郷土文化

第一卷第一輯

大正二十一年一月一日

環境を超越せよ

村川潤造

新生精神の基調 (創刊の辭)

郷土自由教育の提唱 (評論)

諸根樟一

村の一隅より (感想)

諸根樟一

郷土の大背景者を出せよ (論文)

作山喜作

自然 人 思 潮 (拔萃)

春 草

永遠の祈念、生きんとする力 (詩二篇)

未 人

地上 佇 拜 (詩五篇)

原 拓 二

郷 愁 (戯曲)

加茂勝夫

大地の搖籃 (創作)

編輯局

雜 件 (社則)

## 新生精神の基調

——創刊を曙に抱へて——

私達は、ながい間、故郷のためには自分たちの何も耶も、借まないで捧げて来た。近代人の生活形式その他の有ゆるの模倣を忍びてまでも、わたくしたちの「生命の故郷」のためには、凡てに誠實な行ひを竭してきた。

私達はわたくしたちの今の故郷の現在から何かしら攫み出さうとして、夫れらを元に還さうとして、もはや新らしく創り考へるものでなくて將に全體を取り纏めて甦しすることの手法でなければ、可けないそのことが解つてそれ此所まで、やつと辿り着いたのである。

社會はいつまでも、おささまつくらで、鬭争と幻滅の迷の辻に罷り合つてゐる、このあいだに私、達は清新の郷土の中央より徐々に、黎明の畑に、無数な細種を播て、いまに萌ゆる發芽をまつてゐる！

私達は小さき者共にせよ、何時まで信じ有てそんな社會性の突謀の人々を、わたくしたちの未來の所有の世界にやつてくる助案のHを待つてゐられやう？

永遠の始原的レゾネーション！を、薄弱にも熱血の胸に抱へて、郷土建設の行進を、現代の激動の巷のなかへ、突きつけたのである。

私達のこれらの自修心は、今や燃えに燃えて何者もわたくしたちの行く先には怖れるものがない。私達は、わたくしたちの祖先以來傳統したる「村及村人」を基本として、現實義の指導と新興自

治の企給と相對して、現代社會勢力と抗比する前の、郷土を健全に支配する愛護的犠牲の使命者である。

ゆえに、わたくしたちの研究及信念の境内から湧きいでたる、宣言と公表は、第一わたくしたちの村及村人へ、まつさきに報告したい、郷土の自然権能の前に、思ふ存分曝けたい。

そして、其所から無限の批判と當否とを切願したい、瞬時に之等を認容し合現した渾然の球を、渾なき程度に、地上人類に頌ちおくりたい、といふ意志の出發から生れ出たのである。

換へて言ひば真に、郷土及郷土人の爲めに、貢獻をつくしたい及郷土愛護者としての斯ふ云ふ思想をひろく社會に紹介したい、といふ決心の集團から計畫したのである。この互ひの態度は可成慎重に選擇してかゝらなければならぬ、そのことが日本主義ともなり郷土主義の基調ともなつて、間違ひのない行り方で、また私達の書く本誌の生長にとつても宜えと信ずる、これだけにして何もこゝで言はまい、いざ！繰り出さう自然禮拜の大奏樂！

見よ！高原の彼方に、雑草のまんなかを、くろまく若き人々の群よ新生の民族よ！

新年の太陽はいま、濶大の海原を離れた！熱、線、光、放射——色彩——音響を立て、宇宙の一切を代表して萬象に輝いた。私達は、この恩恵の明眸下に、曠野に、睦ましく耕作し無邊際の高唱する朝だ。ふるくさき土臭の空氣を爽快に一掃する無量大のアトモスフィアの速流よ革新の天地よ、地上の有ゆるの更改よ！

あゝ！不滅に生く民衆の魂よ、麗しき郷土形態の再現よ、鋭き姿よ鮮かなる力！の包含主よ。伏して誓ふ！嚴かなる主上の君の、無窮の實土よ、併して我等民子よ！

おゝ早く來つて、新生の郷土に、自由に勞働し、我等に協和してくれ！

## 郷土自由教育の提唱

諸 根 樟 一

私の前身の背景には、何等の教育的意見も有たなければ、また教育家としての純理的資格も全然なく従つて、教育學上に就ての體驗的生活を経て來た者ではない。

今日の教育家の中には異更に、社會文化の根本義に資献する者にして、強ち教育家の經路の下に、或はこの名の下に職業化し現實化したる教育家が、永遠に文化史建設の爲に、偉なる力と思想とを創造に努め、かつ有材な未懇地の民衆とに、教育家の全精神的意義の行爲をなしたつたことは、等しく民族の最大の敬愛者として、吾々は敢て價値附けるも差支ひはない。

それ程に、民衆のために必然なる教育事業は、社會制度の第一要素として、人間精神創作の第一基調として、政治及宗教の以上に、一般性を支配し一切條件を超越した仕事であつて、同時に各人の靈と肉との結合的實在の意識を包含し、人間の全的原则を代荷して、永へに現代人の前に來るまでの過程には、すでに生活上にも傳統上にも、明かに証明されてきたことは確かである。

かほどの効果が、社會文化を組織し表現し人間思想を輸贏し、而して民衆と社會との關係を直接にむすびつけたところの所謂、現代の教育家なる者には、吾々の平生抱へてゐる感念、別に言ひば被教育者の心理と甚だしく性格上の幕が有りはしないかと、思ふに至つては、吾々には深く此の間の研究をせざるにはゐられな。

吾々の、教育家に對する從來の要求或は批評は、一概に、「人格と學問」の共具した人？を押して間違ひはないが、昔の哲人儒者はいざしらず、吾々が現代の教育家としての認容問題は、やはり「人格と學問」の教養の學者を需めて止まない。が文化史的に發達したる民衆の中から產出した彼等の教育者といふタイプの人は、徒らに自己性を軽々しく濫費し釀成した、民衆の現代心をそのまゝに齎した性狀の人で、以前の教育家的真然の根本感念を置き去られた、充分の社會本能を豫想する人、自己の才能を待みて自由に現實主義を云々する者、學問を我物として其等の内的世界に悞擱する者、民衆の生活標準とごつたに、我先に唱議する慾望の極端者……等々に迷ひ出でたる現代教育者の、そこもともなき心理に凋落したる利那主義の現象は、何としたる現在か？。

民衆は動的生活の表現者、これらの意識の世界に超然として能働する者である。從來否現在の教育者に、民衆はたゞ同情なしに理由もなしに、「教育家」といふ名義下に、彼等の周圍を束縛したくない、彼等の自由性を拘緊したくない、現實欲を欲口さしたくない。

といふて魯鈍の民衆性が欲する何物も自由に求めえられる程度の性情を直ちに知りぬさせたくない。教育者をやはり、吾々と或る意味に於て對し、離して置きたい、とゆて、孤獨的に嚴肅の殿堂や最高の講堂に持ち上たたくない。

然しながら、民衆と一所にさせて、當今の學問鬭争や學問の研究に對して宛然、政黨式の割據を推したくない、自己の本然を捨て、何もかも現時の社會勢力に與みさしたくない、詭辯的才能の自我性を、左うかるがるしく發揮さしたくない。

これ吾々の、民衆の以外に、教育者をして差し當りの技倆を要求しないからである、別に彼等の行動が將來上、何等の影響も無いと思ふからである。

學校及學閥の政策は教育家以外の種類に仍て經營處理するのが誤謬がないと認められる。肝心の學者が、一も二もなく現代の教育制度に口舌を容れると云ふことは決して良い意見ではない、一方に民衆と被教育者の前には、大なる偏頗や不安を來す素である、隨て教育者自身にも自己人格の屠戮場とならざるを得ない。現代の政治はやはり政策者の行る仕事で、學閥總裁はやはり其の道の識者に當らせる方がいへ。もしか學者——教育家をして民衆上の權利に一切たしめなば、如何なる自由政策を爲すか或は盲策固議の一修羅場に陥罪するかを慮れざるを得なくなる。

ゆえに、民衆の望む現代の教育家は、依然學問の爲の保守者でなければならぬ、民衆精神基礎製作者でなければならぬ、人類文化史上に、燃るが如き自覺心の所有者でなければならぬ。紛々たる社會推移を語り學閥政黨の間に隠現して自家辨明を播き散すのは教育家の態度ではない、寧ろ民衆の汎論を排擠して靜かに思索するのが、教育家の行使である。

現代性に過傷した自我欲を除りに曝け出した非文化的教育者の失墜が、今何處に？素の本質を見出得るや取り返しうるや撤生されえるや？。

いまにおいて、教育制度及教育家の更改を切烈に叫ばなき時は、民衆と教育の間境に、大なる齟齬の事實が澎湃として來るものと危惧してならない、同時に眞面目なる學者及純眞の民衆教育者の壊滅を何よりも怖ることである。

二

現實に於て、教育家はご自ら自己を過る者はない、最近の思潮界においてもまた社會狀態の中にありても、可成吾々の腦裏や記憶に彼等の行爲について知てゐることが多くある。

尤もこれまでは、民衆の思想や常識が非常に教育家よりも劣級であつたため、民衆が教育性や教育家に對する見解が、またきわめて無自覺であつたため、隨て先方よりは全然無認識な者、非文明な群集として蔑視のうちに指導されてきた運命の徒であつたが、現代性は最早ゆるさない。宛も立憲政治は國民充力によつて、往時の專制政治を左右に引摺りまはしたと同様に、新興の民衆は勇敢に現代教育制度の前方へ塞がつて、そして全然教育と民衆は主客轉倒の位置に變換されてきたのである。

これ現實生活と文化中心主義の發達した具體表現の一步であつて、各個人的にも民衆的にも、自ら個性修養に目醒てきた證據で、洵によろこばしいことである。が教育家によりては、急に自己の微細の世界であつた教育境は、無智な民衆に裏切られて仕舞つたものと、早呑込みして、哲學的に疑人爲的に豫感的に自己絶望をならし、自分獨りの想意から切角の自己の本性を失つた傾向に、陥ちて往たのは慥かである。そして民衆と同じく現實生活の一切條件に血眼になりて亂入したのは無理もないことである。

これ果して、教育家にとつては教育文化と現代生活との和合しない悲惨な懊鬱である。從て學問の眞義と人生の目的とが何等の意義をそこに見出すことが出來ないばかりか、道德以外に社會と自分との間に於いて、考省する時には、何うしても新らしき教育の法則を、望まねばこれらを解決することが出來なくなつた。以上の熱叫がひとり現今教育者の心的革命ではない、將に來たらんとする新生の人道主義教育でなければならぬ。

ところが、教育者の心望は、それまで及びつかないうちに、早くも自暴自棄の淵に沈溺して、自然自己の見識を投げやりにして結果強い神經衰弱病に罹り其上に換動的に社會の潮流に乗り出し、有ゆるの自己方便を利用して反抗してくる！。

この勢は、最初は民衆の雜漢性よりも幾らか鋭覺的に、霧進してくるが漸次元氣が衰退して仆れる。愆うまでなつた教育者は、再び純性の教育家として民衆は後歸を許さない、斯くして教育家の廢亡を安閑として、目のあたり見て行かなければならないといふ理由は何處にあるか？、これ吾々は此等の情況を何んとして察量することができるか、併して更に有爲の教育家を探し尋ねるも間に合はない現在である

吾々はやはりこれらの罪は誰に着せるや、何處に持ち行くかと思せば、依然社會政策家に在るものと斷察しなければならぬ、教育家其者に被せるには、餘りに無残である。

最大の靈體の精神を造るものにして、一步あやまればそれだけ重大な影響のある教育問題は、如何にして攻究するかといふことは中々六敷しい極である理想話である。が教育性の本態は什うしたつて、民衆と教育家との間に凝手たる中心を置いてかゝらねば何等の要素が成り立たない、また民衆自身も徒に教育及教育者の表面を警視した、けでは、何等の著信がない、飽くまで貧弱なる現今教育者を擁護して、現代に負はなければ徹底が覺い束ない。

學問と人格を標榜して民衆と社會とを準據して實感と行爲とを結合して彼等を助案した上に、現代政策の前へ提議すれば、吾々の切實的教育的創造が新らしき土に萌芽されるものと信賴する。

三

むかしは廟堂にて、一割據地の政治及見解を陳言するところの學吏及民間に子弟を養成する儒者其他悠々自然生活主義の畫師詩人乃至十農工商にして、聊かも學問あるものは社會に對しまた社會からも尊重されて、自ら安全の生活に資するだけ、學問の効果が觀面に役に立たないのであるが、現代の學問は、それとは雲泥の悲哀がある。

文化生活をするために文化主義のために、民衆の教育を切求し、教育制度のためには有ゆるの物質的にも精神的にも、現代は犠牲を拂つて惜まないが、果して現代の教育は各人のために幸福を(狭い意義において)與へてくれるかどうか？

一概に言ひば、現今教育は決して各人の心に何もかも與へてくれまい？、其所に現代人悲痛が胚胎してくる！。

藝術を要求し科學を推究し而して自己の一元性を悉く合理せうとしての手段のために、學問の實在を眩

すのではない。

少しも學問ない明き盲らの人が、自由に欲せんとする何物も勝手に撰び出して、やつて行ける近代人の副産的人間には、ちつとも學問の有無を彼れは言はないまた學問をそれは有難味しない、いちづに彼等を傍觀すると些なくも吾々の目には不思議でたまらない、もつとも現代人の學問と生活に就ては各人の主觀客觀の内容によつて煩瑣な解釋があるけれども、單純な見方では學問は、直接に吾々の生活を助けて呉れない、ではこれは現代の學問なるものは死活運命の自在を握てゐるのか因れてゐるのか——國民的悲劇の徵象性を具へてきてゐるのか？と、義疑する儚ない感念を生ぜざるを得ない。

現代教育機關の學校を出て、自分の希望で其ま、月給取とか大學助教に直ぐ様ありつける人はいざしらず、それでも彼等の中には、自分のうけたる學問を利用して、自分の現在を思ふ通りに助けてゆくことが出来るかどうかは保証されない。那是現代學問は吾々の生命とそんなに縁遠へかどよくよく考へて見ると、現今教育の程度では物の統一を目的としてゐない、文化主義教育は偏固の性質を要求しない、已に中學の學科にして吾々は首肯することが出来る。大學の一分科としても其の課程の廣汎には驚く、故に一分科を卒いた學生が更に進んで研究の徒となるには、これらの龍大な中よりほんの一學を抽出して學ばねば、最後の該學問の徹底が認められない、一學問の權威が成立されない、實社會に直ちに這入る者の自己一家の學問の用途は更に推して知るべしである。

吾々は古しの漢學者や國學者流の學問制をこれまで、極く狭少な仕事だと思つて來たが、今になつて彼等の「學問と人格」の繁程に敬服すると共に、往時の制度を笑ふ廉がどこにある？、これらの教授法は純粹な自由の學問を一年も二年も或は三年もかゝつて息む時を知らない、戀て實生活に轉げこんでからは、別に一學問をたてなくとも、己に修學したる要分だけで自在に應用され他人に口述することが出来る。たゞこればかりのものにしても自分の人生に明い力を有て行ける信條がある、そこに學問の實験が

恩恵が自己を獨り手に生かしてゆける。

然るに當時の學問は大學を出たとしても、只そのまゝでは一家を成せないといふ迂遠な状態である。これはとりもなをさず現代性の有のまゝの不信據を語つてゐると云てよい、こゝに吾々の生長の道が眞に開けた前途でないことを、嗚咽に訴へる！

時と費との充分な人にとりては、聊か現代教育制の遼遠性を苦さ仕ないが、これがすくなくも中産階級以下の人によりては、何うであるか？、自ら一職業を建てるなり、官廳民社に就くなりして、一人前となるまでには、暫くの間がある、従て自分の利用する已修の學科の内から現在に使用するものは、ほんの九毛の一に過ぎない、その九毛の一本すら、直ちに使ふには餘りに貧弱である不足である、その後の學科は全部忘却してしまふことは言ふをまたない。それはまだしも、よしか病弱や家庭の事情により中途で退學した人にする、學校學問の前に侮辱をうけなければならぬ、わつか今年位の處で其人は終生一種の資格を社會的に掠奪され了ふ、そして排地されて了ふ。斯る人にとりては尙更の自己の人生に、少しばかりの學問の爲めに反て不幸な道を辿らなければならぬ、もしかこれが昔し式の眞劍な一學究の教授法であつたなれば、其等の人は己に青年に近い時代故、専門以上の一學程中に仆れたとしても、必ず其の學問を捨てずに實社會に立て、相容れるしとの至難でないことを信じられる。

現今教育の實際の功過を、目前にこれほど知り怖びえたる吾々は、いまこの救助の法案を何れに持ち行くべきや？、然らば學問を回避したる性格破産者は如何にして、自己を生かし保償して往かざるべからざるか？

現代學問の索莫的脅威に驅馳しられたる吾々神精状態の程度は今、いづこに向て慰癒せんと願ふか？甚だ暗中の戸惑に悩み踳いてゐる。

四

文化主義生活慾に盲進した當時の教育家の無權威や不人格や及教育施制の謬見は、前述の如きものであるが、これは勢ひ現實政策家に糺弾したくなる。

教育家は自家の學問と人格を尊重する限り、民衆に酬ゆる自由の教育天賦の教育創造の教育は、始めより時に應じて教授せんとしたのであるが、教育制度はこれを自由に有たしめない、そのみかかへつて狹窄し宛替ひ一定の規則の下に緊足して彼等の教養本能を制限してゐる、能力を抑壓してゐる、併して此の教育制度の沿源はまた現代の大政策の杜撰から起因してゐることである。

夫故、不缺陷に充襲し切た當時の教育實行は死教育と變じ干渉教育と隨廢して、民衆の希望と相離るの何ぞ遠きことを、吾々は幾度も證據立てきた。

民衆としても、いつまで空謀の教育を黙てゐることが出来やうか、民衆に茲にはじめて自由教育の現識を自働的に叫んできたのである。學問を神聖にせよ、教育家を自由に解放せよ、舊教育制度の更改を立案せよ、生活と學問を密携させよ、學問は常に文化世界の虚榮の思想を弄ぶべき爲の遊戯場ではない。

ひとり我子を一端の國民的資格者に仕立て行く人間の心には、小さき生活の間から學資を割いて我子を文化主義學校に送り出す心理は一つである。將來その學問によつて彼を自由に培養させたい、實社會に優越の位置を占めてやりたいといふ哀求は、根本の條件である。

けれど、學問の爲に切角一家を擧げて頼みこんだ我子の行先は何んな者に變化し往くかは興味ある考察である。昭代の教育と民衆の關聯とははたして自己の希望通りに行くものか、人間生活標準と直接に交渉のあるものが、學問の本來的眞義は何れにあるものか、人生に對する學問は一切無條件不可解の徵象を以て民衆精神の或る一部に、斷念を齎すものか？ と最後に絶叫したくなる。

吾々はただ理けなしに學問のおかけに依つて自己の現在に直ぐ様適用さしない、教育の智識を有つてすぐさま自己を益するものとは豫想しない、勞働者にしる精神勞役者にしる其等の恩恵によつて、自身の

全我を充分に價値つけたい光明を具體したい始終學問と現在を融合した土地に生きてたりたい、といふ大なる意義の立脚から、現代教育政策及教育家に在るのである。

教育家に飽くまで、教育學の主客混一の根本を見守らなければならない、被教育者の性能をあくまで自由に創化すべく努めて呉れなければならない、それを現制は保護してくれなければならない、教育者に自由の權能を與へて而して彼等の絶体教育本能を増長させるに防てはならない、そこに民衆の精神と對象した著しい生活表現の發達が見られることが明かである。

五

民衆のための實際的教育の集團は強ち、大學制度及官學問を第一とし、官學旺盛のために私學が衰退し私學教育者の頽廢を免れない、一昨年あたりから私大學に大學令を附與したところで、内幕に於ては依然と同じである、只學科の標準が彼我統聯したたけのことで、其他の弊害は多大な續行が活動されてゐるさきく。

維新當時藩學の志士や學者が、あとかたもなく滅亡して、官の輕薄な學吏が天下に一躍先人的教育權を把握したのは著明なことだ、以後民衆はしばらくの内自分等の教育性が、あまりに別け隔てられた結果等しく不平均な人間となつた、それが現今に於てもその因襲界からとれないで残つておらぬとも限らな

3。民衆は權柄家の教育制度を欲しない代りに、現代の如き荆棘づくめで圍繞しきつてゐる官學者充滿を欲しない。

民衆の教育は、吾々自由の意志を、吾々自由の場所、極めて簡單な制度で教授されたい、虚執の爲の教育や文化主義生活の根本とする文化の冗慢餘影的手段の教育を願ひたくない、曲學何世の現代教育施針は、何日まで民衆の慾望性に維持されて行けるかと思ふか、併して民衆自身もそれを義理たてゝゐる

必要をどこに認むる？

こゝに現代の索莫難澁な教育の非を鳴らさないでゐられやうか、民衆の自由な意志に訴へた教育の自分を取り立てられるに至りて、近代的要求の一切が包含されると共に新らしき教養の源泉が、樂々に塗り流れて文化主義の固い信念が表現される分けである。

ルツソオの——提論は自然の性、自由の意志を飽くまで抑制しないで所をいらばす思ふまゝに教育すべきである、國家の爲とか社會の爲とかを標準として、國民たり公民たりの義務教育は、本當の教育の根本性から背戻したることだ。其の人を人として眞に個性を失はない程度で、勝手な教育を與へるが、いへ、自分の欲しない學科、自分の行かれぬ學校を彼是言ひ附けたこと、それは駄目なことだ。そして社會に出た時の用意にと、無理教育的誘知を與へたこと、同じく其の者の本性を傷けることだ。人として自由な教育を完全に作された者には、如何なる事に打突つても、靜かに處理して行けるだけの考へのある人は最もよく其の者の自由意志に適つた教育上の効果がある証據だ！。と絶説してゐる。

成る程民衆に徹底された教育は、現實生活に打突つた時の裁け方は切れ味が宜えのは勿論な道理だ、而し現代教育は、これほどに徹底した覺悟を有つてゐない、只規定の學科さい澤山詰め込めば責任が足りるものと信じてゐる。民衆の切に欲する學問は、徒に盲從主義の教育では何にも役に立たない、そして又學校の存在を、到る所の自由の場所にも建設して貰ひたい、只に資本主義の學校では、何等の價値がない、例ひ田園の勞作の傍ら午前か午後何れかをさめて附近の自由な大學範圍内の徹底した一基礎學問を學びたい。

結 論

これが即ち現今の教育制度の缺陷を充案する所の重大な意義のある民衆補助教育政策の新運動である。以上にて於て現代教育に對する私一個の感想を概略試みた、がまた何かしら私の追及性には充分言ひたい

ことが切れた理ではない。縦んば私の見方が餘りに狭少な淺薄な根柢のない言ひ分だとしても、私は、此の誌面にこゝ以上述べるべき場合ではないから擱止することとして、最後に一村學究者の私が現在痛切に要求したる信念を語てみたい。

私は、昨年の五月より本年の七月まで、約一年以上關西地方に旅行した、其の間を利用して常に、關西方面の日本的に發達した状態や文化都市の中心思想や地方町村の現實行動を仔細に研究してゐた、それと等しく自分の内的性格上の感念にも深く自省し考省して來た。漠涼な東北の一僻地に歸郷してから、尙も彼我の態度を比較したり憧憬したりして獨り苦惱者の體驗を送つてゐた。

純粹な郷土——純粹な郷土人と文化の彼方に馳驅する無數な——混沌の集團とを對比して、夫々想意してゐた。

何處からとなく、私の疲れた全體の環境に默示を叫びたものがある！

郷土人を愛護せよ、郷土精神を擴充せよ、それには、現代教育制度に代るべき、郷土人教育の根本を樹立せよ、林間アカデミー學派を創設せよ、そこに郷土性の一切が特に大地の表面へ搖盪せんとする凡てのオリヂンの人間を造り出して呉れる、其の中には現實の地方煩悶も、疲弊も荒蕪も、乃至郷土人的欲求の萬端が含有されてゐる、それを開拓せよ善指せよ！といふインスピレーションが短才の私に強感した。

地方に、現今教育の制度を直ちに持ち來ることは到底及びもつかない希望だが。當今諸所に設ける講習會或は小學補習教育を、もう一つと改造して、何等かの善手段を施せば、決して私の提案は空想の問題ではない。否現代文明から餘りに干渉をうけた民衆は、已に大なる反動より大なる意識の存在を認覺したことは確かである。

此の境より早晚大學教育の必然を、彼等の田園から、村から要求して止まなくなる、こゝに始めて人間の統一の現識が發達して來て、超然たる大産業の村を見ることは容易である。

社會政策家が、現下の農村問題や地方救濟策を悞惱してゐることは、極めて單見なやり方である。なせもつと根本概念に向つて企劃して呉れないか、それはいだつらに地方を宛然資本主義の郷土に、轉化せん？とする過勞になりはしないか、と性急の吾々には思惑されてならない。

この場合も、郷土教育の確立が實行されたなら、健全な郷土思想がひとりでに湧きみちてその中には無論地方混迷の胚胎は一掃されて自ら踏調され自ら新制を、彼等から作り出されるのは必定である。自發的農村意義が創化されてくることは疑をいれない。

地方政策家にして、こゝに着眼し、現時の地方小學補習教育及進んで講習會を完全に延長して大學制を模倣しなば、優に國民基礎教育はゐながらにして普及されべきである。同様に郷土教育家？これはあながち現職にある大學教授を引張り出して、任するまでもなく、幾らでも人選は自由である。其の時は地方にも殊更に尊重すべき學者がゐないとも限らない、現代の學閥主義の爲に、殆んど絶滅したといつても差支ひない、吾々の要求する郷土教育者は、たゞに往時の漢學者流を指すのではない。現代の學問主義は凡て階級制度のところへ資本制度を構へ、被教育者も其等の門閥内でなければ、社會に學生たることを認知されないといふ、形式學派に猛猪的に投校を争へ騒いでゐる。

これは一面には、現代心の反映であるけれども深く考證してみると、一方には我郷土を蔑しらしたる心理状態の空我といはなければならぬ。

この邊の間境を主觀的に感傷的に研究してみると、吾々は望外たるを得ない國民的絶望の悲哀を發するより外に現實はない、而してあまりにこれらの状況を探索しすぎると、勢ひ現代の制度に反抗を向けなければならなくなる、けれども、吾々の現在はそのを豫期してゐない。只靜に此の際の郷土教育實行を提唱して民衆擁護の大先覺者を俟つより道はない。出でよ！郷土義人よ、郷土人救濟者よ、かくして現代の大學令より一部の權利を民生の吾々にも、もう少したやすく亡つてくれ！

## 村の一隅より

諸 根 樟 一

關西から一年ぶりで歸郷した私は、二三の知己の土地や舊い友達の中で、旅行先の感想や視察の要領談など語り會つた後での次手話しに、現下の農村問題や郷土概観に對する多少の意見を述べてみた。それで、「現代政策は餘りに村及村人に關して遣り方が過傷すぎた按排でないか？私ひとりだけの考へでは、地方問題は地方人の頭に徹底した教育さい與へたなら何でもないことだ、彼等の精神基調を造つたなら、地方の一切が樂々に自ら表現し、經濟自治村が出来上るものだが現代政策は不幸にして、之等の原論を認めない。

では何うしたら現下の地方政策は望み得られるか？私は、それはさまで至難な方法ではなからうと信ずる。私は前言の通り先づ何よりも村學教育を向上したい實際に其等の自由な教育制度を郷土の間に立てたい、小作爭議や土地廢退の解決方は當時の餘流であつてほんの一時凌ぎの苦策にすぎない、これさい認識するに、現代は餘りに疲れてゐる！」と語つて、私は其の日は友人と別れたので有つた。

私は靜かに自分の現在を考へてみた。自分の懐しい思出の豐潤な故郷——郷土といふ意義に就て、感念に就て、自分の郷土の實在性に就て、すくなくも何をか爲たい成したい求めたいといふ、切愛の根柢を、願ひを。

私は父の漂泊した第二の故郷に生れ十五にして仙臺に出で、二十才にして東京に學び、二十三歳にし

て他所に轉じ尙も白己を養つた。

少年より現在まで恐らく故郷を想ひ自己の前途を豫期して常に、多忙の半生を徒消して來たが、扱其の間私の心に一番強く残したものは何か？と追ひ究めると自分には一切の証跡が混滅して行く！

私は此の際の幻滅の心裡にも、何かしら自分の内臓から旋流してくるものがある、最後の啓示が自分を導へてくるものがある、それが、現代より逃避せよ、友達とも別れる、都市の索莫よりはなれる靜かに故郷に歸りて自分のために掘り返せ。といふ偉大なる現實告別のインスピレーションが、私の歸省の日に叩かれたのである。

大阪を發車する前の、目に見ゆる街、民衆、群がる勞働者や車馬は、私が其の瞬間のサイトには、惡魔が一同として私一人りを無理矢理に汽車の中に押込めて、田舎の何ものもない間に拘禁して、彼等ばかりが文化の面白い見物をしてゐるやうに、思はれてならなかつた。

故郷へ着て、ほゞとした翌朝から、昔しの村の友達や以上の仲間がまた、自分の周圍に集つて來た、そして、種々話しかけられたり他に亦いろ／＼用事があつたりして、自分には此處まで惡魔が附て來たかのやうに、落ち着きがなかつた。

愆ん女位なら、ごちらにしてもいえから、見覺えある惡魔の多數棲んでゐる争擾の町にゐた方が、よかつたご悔もし嘆ても見たが、最早故郷に着てしまつたのだから、どうすることも出来なかつたのである、一寸した自分の考へ話しが、郷土自由教育といふおほそれた提唱を語つた爲に、地方の新聞に私といふ名義の郷土主義がヅラ／＼に書き替へられてゐた、これには自分にさい一時面喰つたが、なるほど私の全精神は勿論郷土愛、郷土味郷土性あらゆるの、燃犀的感銘が充溢してゐた。のだから他人が彼是批議批評することは、口に戸を立てられぬ始末だが、私には今何等のそれだけの外深い研究がなかつたのに、鳥語がましくも、自ら堂々と郷土理想精神を振り翳して、よし狭い我村中を駆けまはるたけにして

も、氣の知れない傍觀に堪えないが、一度出過ぎた態度はまさか、後に引込ませるほどの、泣虫でもなかつた。

それからすぎると、方々から之の意義に關しての間合せや、郷土文化の運動に對する要談や或は一個人としての村制の客觀的批評や椰論や、文化村建設に就ての序説や乃至は近代の思想をそのまゝに虚構して來る者もありて、短才の私を僻易させ恐慌させたのは五度や六度でなく、亦私一個人といふ人格についてまで疑義と誹謗と讒辭とを頻に襲ひ來たのである。

それで私は深く省みた。自分の性格の足りなさに不用意さに輕弾みな自己主張の妄舉に恥ぢ有つた。久しぶりて、蘆芥が沙漠程堆積してゐる書齋の中に這入た、开して机の面の眞白になつてゐる砂や壁土の散落を間に合せの新聞紙の雜巾で、がしや〜と音させながら掃つて坐つた。

周囲の書架の本は幾段にも縦列されて、一年以上も抜挿しないところから、洋書の背皮文字だけが光てみえて、自分には直ぐと何んな内容だ。かといふことだけは幽かに想像することが出來た。

少時私は沈黙した、何の爲に自分はこれしきりの讒侮や褒貶や自己内省に、現在を焦りくるしめざるか、切角故郷に歸つた無限の悦樂のそこそこではない。

温かき大地の懷襟に一年ぶりで珍らしく落ち付いたばかりなのに、まだあらゆる煩悶に悩まなければならぬかと、不思議で耐らなかつた。

私は靜かに冥想しながら情さ半分申譯半分に自分の口禍を幾分辨明する積りで、躍然！郷土愛護者の看板を自ら書てみた。

自分にとりては餘計に、世間の人々から及びもつかない馬鹿を告白する如くまた、一部取り着ける出方でもあるが如く見られるは、是非もないかも知れない。

併し此の際私の書き擲つたこれらの原稿を書き續けてまさに終る頃までには漸く自分の心の一端に光

明が弗と指してきた力が添出してきた。

社會人はいまのこれほどに現代氣分を喜んで受理して互に生活しあつてゐる、權力者は多數の民衆を自分たちの自由にせうとして、亦民衆は自己の保價の爲に彼等の方便を打ち倒さうとして茲に興味ある世紀の分列的運動を騒ぎあつてゐる。そればかりでなく彼等は他人達の利害關係も遠慮しないで征服しあつてゐる。

自分も最初はこんな中の非想な極めて低級な思想の所有者であつた、それが二三日前に大阪を發つまでのトラデツクな欲性であつたが、がらりと變つた。

偶々故郷へ歸る村の道に、近代人生活の痛苦を敗殘した一人が、徑々歩つて考へてゐるとあたり一帯から妙な歡呼や反抗が浴びせかけられるやうに身體が重くるしかつた。

八月に近い地方の暴風雨時がくる頃の前の稲田は眞青に半分俛首てゐた、そして收穫の實を殘忍な彼等の來ないうちに偷み取るやうなヴェチタブルの習性などを愛感的に思つてみた。

そして途中で古い見覺のある村人に四五人出逢つたので急に自分の現在に己に郷土に這入てゐるんだなといふ強着心がむら〜と一層交してきたのであつた。

鮫川が右手の岸に勿來海岸に向て流れてゐる、其の源には佛具山が嚴然として、俺が洪水の開閉を自由に握つてゐると、言はぬばかりに壓迫してゐた。其の下には小さい丘陵が沈澁の如く乾分の如くに畏こまつて匍伏してゐる麓に、私の故郷の村の薄灯が瞬たいてゐた。

私は暮靄の中を行くうちの知らないまに、何時しか涙が浮んでゐた。と思ふにつれて近代主義者の絶望的な惱みや不可性の凡てが私の故郷の門口に將に入る瞬間にあとかたもなく掻き消えてゐた。そして自分は何等の所有を否定した一村人の幸福な純朴の心に還元してゐたかのやうに分つてゐた。

少年の故郷、父の墳墓の在り地、古典的徴象の豐滿せる村——警異に輝く新史上發見の、偉大なる

郷土——北白川宮殿下の御幼時の奇蹟的光榮の所、しかして伏して感激する私の生命の故郷。といふ尊い標示が私の亂舞の現状にひしひしと明るく汗い漲ぎつて來たのであつた。

下らない一人間の地の子が、我祖先と郷土の前に額踵いて一生一代の懺悔と更生の奉告を爲る時は、人間としてこれほど尊嚴な態度と資格は、他にあられまい。そこより無言の教示がだん／＼に現出してくる？その時の刹那の強感こそ、眞の人間體が認識されるべき時である修度されべき法悦の祈念の境であるものだ。

と、考へる邊もなく再び「自然に歸れ！」といふ高調が、私の最後の前に戰慄して來た誘知してきた。

成る程、私はこれらの前に何事も反言する勇氣がこの場合できるだらうか、否認する理由が他にそれとまでできるだらうか、遁れる道があるだらうか………一切をそこに捧呈して自然人の自由の資性を、郷土の前に乞ひ願つたのである。

狂亂のごとかりし私は冷靜に戻つた、自分の心撃は鎮んだ、個性を直視したそこから自分の新時代が生れてきた、自我を合現せんとする現實が始めて體驗されて來た。

かくして、私は故郷の戸扉の前に踞いて禮拜した、永へに自己の魂の安住を大地に委托した。やつと我家に「只今」と挨拶して這入た時は私を待つ者は老ひたる母と九歳になる養女と、それから家鶏や舊知の猫だけであつた。けれど私の何も事も哀ひ切つたこの場合には、強ひて留守中の我家に對する感謝の挨拶をせなくつても、不知涙が滲み出してゐた。

無慘な貨車積のためにトランクの表皮が破れて、椽縁に横倒しに人夫に置かれて、あるのが私の最後に於ける放浪の名残を示してゐた。

二三日前の私の手紙で歸省するのを知つた老母は、態々近所の百姓若士が釣つたといふ鮎を六匹ばかり

私の夕食に下さつた。

其他の老母の手製の羹！例ひ鹽辛くても私の味覺を左右する權利がどこにあらうとそしてかほどの羹に酬ゆる私のその際の報恩の道は、いかにしたらいえ？だらう？我儘の言ひ放題をして、これまで旅館の女中どもを叱りどばしてゐた習慣と對照したらば、私には血の感涙を捧げても足りなかつた。

食後、徐々に各所の繪葉書や土産物などを披けて贈り、雜話したあとで靜かに寝た。

油の切れたやうな柱時計の錆付た音響、が直ぐ枕頭で振動されるので、安眠するに手間とれた。

碌に骨休めもしない翌朝から、それらの人々のために、私の樹間の家庭は急に賑かになつた、そんな小混雜に防げられて街頭の友達らへは着信も出せなかつた、五六日目に勿來から平地方にやつと出掛てみた、また多くの昔しの友達等と會合していろ／＼語つてみた。二日ほど泊つて、歸家してはじめて方々へ手紙を書いた。

するとまた別な組の友達や、未知の人達も押掛けてきた。

依然！近代主義者、惑溺の文學農業青年、小學教師、附近の炭坑役員、自己を現實頂天におき、此方を嘲笑的に半蔑的に始めから自己を高く品位つけて來る自我誇張の丸出しのものも、私の思想や行爲を半信半疑に、試験するつもりで武者修業流の輩も見參した。私は一々應對するのうちに厄介で耐らなかつた。

私は、かうして幾日かを、其等の訪問者や道場破の猛者だちのために費した、そしていろ／＼の個性を繊細に彼等の或る性分を考案することが出來たのは何よりの勝利であつた。

それで、私の心の反撥が、自分の能ふ限りしひて現在のまのあたりに對抗して、把持して行けるだけの充分な助働が附いた！冷靜に大地の前に沈黙しながら………。

# 郷土の大背景者を出せよ

作 山 喜 作

偉大なる人物？同時に正義の人物？と一々區別してかゝつたら、現代誰が此の偉大で且つ正義の人格に適合して崇仰されるか、そして又大人物格といふ標準が何處より比較してかゝられるか、一寸餘りに無理な要望である。

その差はあれ、我々が大人物とはやはり一世に大なる事業、参政、行爲等によりてこれらを發見しなければ到底往時の和氣清麿や楠正成や日蓮や乃至乃木大將等を過去より引き出すを得なければならぬ。ゆえ我々は出來得る限り忠實に現代人の中より幾分大人物の？型の先輩を探し出して研究することは強ち徒勞ではあるまい。

陸奥人の最近の名残として新しく我々の記憶

に未だ消えざることの出來ない人？として大正十年十一月四日午後七時二十分東京驛頭に於て、名も無き一少年の爲に刺殺されたる原敬去りて轉た失望の折柄、我々は更に生存人の一者を纒かに東北の入口に河野廣中に見參せざるべからず、併して彼れの出でたる郷土の大背景より無限の力と啓示と考省とを我々の前に展げ晒けて自由に語り會いたい。

社會には名ありて實無きものあり、實ありて名なきものあり、名實共に備ふる者は一代に顯揚せざるも死して其の人の功蹟を無言の間に認められ自ら傳へられて朽ちざるものなり。然れども斯の

如き完き人は、千萬中のなかに克く一人を見出し得るか？半人を求め得るか豈幾億の人類より一釋迦の代出を以て辛とするか？我々は民衆を尊重するもの徒らに幾億人の人類と一釋迦を替ひることは已に抗逆の矛盾も甚だしい對照である、否幾億人の民衆を欲せずして、現實に生き得ると言ひるか？

名有るも實なきも、實あるも名なきも常に滅び生れ去り來りて人間生活の環境を作りて、其の中の一人が天下の政權を握り或は國內の防禦を確保する者、最高の講堂に民衆の仰表を期する人大富豪に成り濟したる人、終生徒勞に了る人等、只其の現實の變化に過ぎない。

有能も無能も僥倖も不遇も此の範圍内に外ならず、たゞ其の現實の刹那の先景に於ての名實——僥倖の均量を贏ち得たる者は、先づ一生の有徳一世の適材と稱せざるべからず、而してこの人を其の時代の大人物と推さなければ、何時れに我々の先人を見附け出し評價しうることが出來やうか、あゝ！

郷土は人間のためには大なる畑である、この曠野の雜草から一株或は一本の超然した草木が生れて始めてこの畑を代表する時に、この畑の土壤の眞價と畑の地勢が他に輩出して行かれる。

この土壤は根本である人間の本性の原始である、地勢はこの畑の根強ひ故郷であり精神の基調であるこれらが各人間のための偉大なる「郷土」である人間の一切を抱有する所の世界の領土である。

我々は、この畑より一本の木一株の草を大きく生長して行きたい、自由に夫等を耕して本當の作物を拵し上りたい、自然の中より大地の中央より眞の人間を生れさしたい。

人間は如何なる大なる者にせよ彼等が郷土の前には跪拜しなければならぬ、そこに彼等の生命の實在も映象も認識される。

こゝだ！人間は自分の郷土の前には老若も大小もない、其所より我々の幾らかでも生長に適した仲間を完全に育て援ける義務がある、要素がある

そしてそのためには有ゆるの仲間の力で一人の郷土人を混成して作り上げなければならない。そのうへで社會に提供しなければならぬ、現代を超越した、一人を、我々の郷土より誕生させて送り届けなければならない、そこに感激の郷土が現出する、光榮の郷土が出現する。

人間には郷土なくして生き得られうるか、郷土の感化なくして人生を見え出しえるか。人間の本性の出発は、何處に祈求して自己の眞實の姿をみとめぬられるか自己の力が發しださうるか？

フシントンは大木の郷土を背景しナボレオンは大佛の郷土を代象しビスマクは獨逸を、ネルソンはシイザーはアレキサンダは太閤秀吉は成吉思汗はハンニバルはコロンパスはオイケンはベルグソンはアインシュタインは……等は皆彼等の郷土の一本の優越した自然の樹に過ぎない、自然人の一産兒に過ぎない。

傳説の郷土、神祕の郷土、宗教の郷土、奇蹟的

不可思議の郷土は、みな人間の一切の憧憬の極美を抱合する大表現の家であり所でありて、人間はこれらの前に常に至純なる行爲と禮讃とを捧げなければならぬ。そして土の精靈に祖先の墳墓に、永遠の企てと望みを潔く公明せざるべからず、誓願せざるべからず、前世界人に超出することを乞ひ希はざる可らずを。



# 自然



# 思潮

還元の前に

相馬御風氏

これまでかなり永い間、自分の心の苦しみを訴へたり、叫んだり、時には何事か自信あるらしい物の言ひ方をして来た私は、此の告白を境界として沈黙と忍従を主とした宗教的自修の生活に入るべく努力したいと思ひます。そして凡化した一個の人間として、自然に對し、世界に對して念々感謝と敬虔の生涯を送りたいと思ひます。

私はまだ四十になつたかならない年に過ぎません「そんな若い身空、でそんな老耗た治まり返つた意思を出すのはよせ」と激まして

くれる友人もありますが、現在の私にはその「まだ早い」と云ふ言葉が一番怖ろしく響くのです。私はむしろ此の決心を此の上なく歎ばしいものと思つてゐます。

(還元録)

## 郷土藝術の眞義

加藤朝鳥氏

後藤宙外が田園文學を主張してから、十年おかれて、片山孤村が唱へたのは此の郷土藝術藝術である。此の前に田山花袋、島崎藤村などが頻りにロリカルカラーの事を説いたか。理論の上から云つても孤村が一番よく纏び離れた獨逸に於ける郷土運動の紹介であつて、リエンハルトの主張や郷土詩人グスマーフ・フレンセンの文學を祖述し、世紀末的な文藝アカマンの文藝、が淺薄な物質主義から脱胎された廢頹の藝術に過ぎない。

で、最近の紛々たる労働文學や都會文學の氣字狭少に比べて、清濁なる絶對境界の無限な土臭に富むた郷土の原始的野趣を其儘に荒削して敵き上た品が、眞の郷土藝術の成果である。

或る一派の論者は、郷土藝術は田園文學と同じ意味ではないか、と反問する人も有るが郷土藝術は従来の田園表情に現れただけの小さな領分ではない。即ち郷土藝術は歴史及國土なる偉大なる根本感念に基調してゐる點で所謂「田園文學」よりも遙かに進歩してゐる郷土理想の偉大なる實在性を包含してゐる代荷してゐる最大目的に於て、彼等の意見とは異なる！ (新文學辭典)

## 農民美術と私

山本鼎氏

私の企劃した農民美術は要するに産業美術であつて、利得を伴つた嬉しい創造的労働を以て、冬季農閑を埋めやうといふのであるが、素材を探て同型の箱や木鉢を數多く作るやうな仕事は、指物挽物の職人に任せて其買材を塗たり描たり彫たりする仕事を農民諸君の副業に爲たいと思ふ。

吾々は産業的使命を指と共に、其製作品を「安値」に公衆に提供して所謂平凡美術を徐々に高めて行ふ野心得である。勿論其等を社會の一般製造業者と同じく完備するに

は、諸種な道具や考案が要することは必定である、而して澤山の農民美術屋が發達する時期が来たら、多分農事を副業とするやうな専門的な地方特志の農民美術屋も集團もあつちこつちに現れる事で有うし、其人々の手に依て數ヶ月を費して仕上られるやうな珍重すべき農人作品が生れるものと確信する。

吾々が希ふ農民美術面の使命は藝術的であると共に産業的であり(安値)のうちに「清新」な郷土趣味を植えて往うとする意識のものである、想ふに天上のものな地上に引き下さるさうとするのが、私の虫で、惡の芽が何の人間にも美の享樂と其表現的機智が備つて居るとするのが、私の理論で、其理論が何れ程の深さに現されるのかを知らうとするのが私のパツションだ。

郷土詩は世界の魂である

白鳥省吾氏

わが血液には、郷土の音楽が流れてゐる。遠く歩んで来た民族の心が蘇生つてゐる。これは何うしても否定することの出来ない事實である。

私はこの郷土といふもの、影響を脱却することが出来ない、又、脱却しやうと欲することもない、寧ろこれを喜ばなくてはならない。これを本質として飛躍するところに前面に展開されてゐる「世界」を明確にし、詩の廣い領土を純粹にする、その出發點を與へるこの意味に於て、東方を出で東方に囚れざる解放されたる東方の詩人の出現を俟つ。

ガアベンターの精神的民主主義

宮島新三郎氏

彼は「民主主義の方へ」を著く爲に、何者にも妨げられない寂しい田舎に送つた。或る時は庭園で働かす時は鴉鳴やシヨベルと土を掘たり俱樂部を引いて歩いたり、或は附近の農村青年俱樂部や農夫集會所を訪れて、彼等と一所に快談したり研究したりして居た。

先づ出来あがつた上の大藝術を

ラスキン

大なる理想藝術家は似而非理想派が「卑俗」

と考へやうな材料に、何でも構はず手を付ける。否「構はず手をつける」偉大な藝術家は此點に選擇の自由を有たないのである。彼等は自分の描寫が卑俗であるか卑俗でないか知らない、又そんなことに頓着しない。彼等は現にそれを目撃したのである、それは事實である。若し彼等が描かうとする材料を拵へ上たのなら勝手に或る部分を棄て或部分を附加することが出来たかも知れない。併しそれは拵へ上たものでなく既に出来上つて現れたのであつた。彼等は基だしくその光景に打たれてその内の何處が卑俗で何處が卑俗でないか云ふことを考へる間がなかつた。

「自然性」に歸嚮する願望

吉江孤雁氏

トルストイが、一生を通じて苦しみかいたのは彼の「自然性」と「不自然」の間の争である。ミフランシス・ケリアスは言つてゐる、不自然に打勝つて自然の姿に返りたい時にはそれが出来てもやがてまた不自然な混濁状態が舞戻て来る。かの偉人が最後に到つても尙農夫の顔を一人一人叩いて、その聲を

聴たならば、自分が求めてゐた真の聲を得ることが出来るであらう、さうやうな極まじい叫びを擧げてゐるのも、その争ひの長い持續である、併しそこに深い教訓が籠つてゐる。總てロシヤの偉大なる思想家のその偉大なるべき所以を突きとめて考へて見ると、高き階級の者を低き階級へ貴族を平民へ都會人士を農民の生活へ、人間のライフを自然のライフへ、表面皮膚の不自然な生活を本来自然の生活へ歸嚮せしめんとする。大地を母と呼び農民を尊重する心、其究極は人間の「自然性」を求めてそれに還らんとする願である。

現存は只田舎人に

ロマン・ロラン

殊に吾々は吾々の田畑を耕して、其處に埋れてゐる豊富なケルト民族の寶庫を掘出す事に努めなければならぬ。其處に眠つてゐる傳説や物語を蘇生させなければならぬ。吾々の野と森とをそれに充ち満ちてゐる。これ程のお伽話のやうな物語と詩的なそして皮肉な美しい音韻を持たた國は他にない。大都會の人々にはもう、久しい以前に、其の過去との縁を断つて了つたし、多量の田舎の人々はそれとは全く違つて、過去のまゝで、残つてゐる。大杉榮氏譯「民衆藝術論」

何處からともなく土の脈搏が通つてくる!

故 中澤臨川氏

今私は眠る。四肢にはなほ快よい土の脈搏が通つてゐる、よしや私の喉が閉ち私の無感覺の域に入らうとも、私の五体は、魂は——彼の大地が贅澤にはぐくむ草の呼吸とともに彼の大地が静かに永遠に抱き舞つた百千の靈魂とともに未來永劫に流つて可憐なる無限無数のまだ生れない生命とともに、さては地の喜びを頌つ空の星とともに、汪洋たる生命の諧調を合せてあらう。「愛は、力は土より」

# 永遠の祈念

## 春草

あなをなごした大空  
 闇にきらめく一めんの星  
 永遠の輪廻に  
 燃えくるめく大いなる太陽  
 そのもとに  
 こんこんとよりあがる大地  
 眞直にたつた木  
 一めんに茂つたみどりの葉  
 ふさふさと捻る果實  
 お、天は榮光を頌へ  
 地は豊穡に満つ  
 そのなかにふるひたつ人生  
 よろこびもかなしみも  
 愛も憎しみも呪ひも

善も悪も  
 一さいが人生  
 そを統ふる全智全能の神  
 されど我はそを知りませす  
 唯絶対の自我に浴し  
 悪の根を絶ち  
 斯くて人生の抗逆に起ち  
 永遠の苦惱者のごと  
 すべてを認識し  
 すべてを體感し  
 偉大なる靈魂の感激に没り  
 聖なる頌榮をうたひ  
 斯くて穢れたるものを一さいの淨土と化す

お、宇宙の精靈  
 人間の創始をおもふ萬法不滅の想象よ！  
 アダムは智慧に力づき

# 生きんごする力

一粒の種子は芽萌ゆ  
 あらはなじめりかの地の土  
 棄てられ塵げられたるもの、  
 尙核心まで失せない生の力

イヅは胚胎もり  
 斯くて樂園を追はれたる人間は  
 地にうづくまる惡の靈に  
 一さいを投げだし  
 空漠たる時の流れに  
 永遠に葬り去らる

お、天は榮光を頌へ  
 地は豊穡に満つ  
 神は全智全能にして  
 我は唯絶対の苦域に没り  
 唯法悦の祈念に燃えたつ

今其の生長のほどばしりは我等に満つ  
 我等魂の  
 いたましい本然の叫び  
 塵げられたる人間の  
 苦しきは愛まなり力となる  
 東の闇に叫ぶ自由の聲よ！  
 薄暗き地底の坑道  
 さては汗と油煙に滲み出た慘蕩の生活のなかに  
 苦しき呻吟の聲は高鳴る  
 岸邊に打寄する永遠の怒濤のごと  
 瞭々絶えず高鳴る  
 正義よ人道よ

人間の魂のなかに潜める不滅の想象よ！  
 汝にしみ透れ鞭打て  
 我が心霊の囁き 小さき叫びよ  
 さらば——我が友よ

# 地上佇拜

未 人

## 白日の涙

歳 目かて、疲れた足で、漸く大阪城に着た自分は、何も  
の思案する力なくうせた。

中ぶるの洋傘を引摺りながら、佇んで、

正門のあたりを、見上たり見下したりしてゐた。

自分はこの偉大な、ルエンに對して、何事も言はないで、  
涙を捧げて去つた。

一一六、一四日午前十時

## 屋島山にて

屋島寺にて、源平名残の遺品を見て、  
村雲尼公の名つけた、談古嶺から屋望した。

静かなる海峽！ 微弱なる夕映！

夢の如くに迫る。

戦闘の曲―舟船の雄叫び―血潮、  
没落、悲鳴……………現代。

されど、自分は時代の、何をも追究しまい、  
そして、歴史の何をも嘆かまい！ 六二二日午後五時

## 紀州連嶺をゆく

高野口から、獨りの老母といつしか道れ伴になつた、  
舊式の巡禮の姿で、現代的な旅行者の姿だが、眞夏の坂を  
語りながら行く！

あ、！―もう一時過ぎた、喉は無暗に乾く、  
紀州山脈の高原が、二人りの前に負ひか、つてくる。

杉、檜、谷、水、鳥、人家なすが、長い間の人間の爲の實在  
表現？ だ！

自分がアルパカの上着は瀑布の如くに、汗ばんてきた、  
白靴は砂塵りで茶色に變化してゐる、そして全身は老母よ  
りも瘦れ切てゐる、何といふ意氣地なしの信仰者よ！

そして老若の二人は、今まさに壯嚴な宗教の境土へ、  
入えらんとしてゐる！ 六二二高野山女人堂にて

## 箕面の飛沫を浴びつゝ

煤煙の阪都の傍に、突几として深山の形成を、まのあたり  
みるのは、自然の愛欲になれてゐる自分にさいし、驚喜した。

何といふ、最大な落下だらう響だらう、何千年、も同じ一  
間ばかりの崖<sup>カシラ</sup>を流れてゐるのに、

兩岸の位置には、少しも變化がない、間闊の草木には影し  
も恐怖がない、

そして、測り知れぬ流量の震撼が、些しも人間に悲哀を感じ  
させない、あ、優秀なる啓示力の高調者！

六二九兩攝津箕面瀧にて

## 寶塚バラダイスの悲哀

現代物質をあくまで、上手に平氣に使ふ、關西人の性格に  
は、何こも生きんこ！―する低強いころがある。

彼等の育てあげた少女歌劇！

へ自分と友人と、熱喚の中に、  
小さくなつて混つてゐた。

ニヒリズムの叫び、アナキストの跳躍、激昂者の出沒―  
狂ひる悪靈―無踏者、  
らが無數に自分のぐるりに、襲つてくる！

あ、苦しい光景よ！

民衆の絶望的憫れな歡呼者よ！

……………東北の人間には、

お前途の藝術も本能も凡てが、知らない！

七二二兩寶塚温泉にて

戯曲 郷愁

一幕 原拓 二 (禁無斷轉載及試演)

人

森 哲 小農生活者

同 しげる 妻

同 つち 母

同 ゆきの 尋常二年生

相知 操子 元小學教師

其他、村の若き男女數人

現代、早春、寒い空と光り交錯の日。

所

平郡線地方、或る村の離れた一軒家。

景

森哲の二階建の古びた家。

春風の強く吹く日の午後、雨戸半分閉めてある。只南向の庭前の椽側の分たけ開けてある。前方の小山の中腹を切り崩した赤土の面には、附近の炭坑の運搬線路が通じてゐる。

東と西とが開豁して荒れたる田畑など見える、空地の隅々には梅の樹が數本植けられて、蕾が漸く育て来たばかり、其株下には振つ散葉が所々青く見えてゐる。

撥ね釣瓶の井戸、背戸山の杉、落葉林など一帯に山家の早春の弱靜を想像させてゐる。

フロントには、一通の書翰が投げだされて風に飄つて揺いてゐる

哲

(二十九才位、汚れた皺だらけの詰襟を着て、菜種播の畑から鋤を手にぶりさげて悄然として来る。)

あ、疲れたつかれた、半日位の労働でこんな、大きな豆のタコが出るとは、自分で自分の弱者に慄れて了ふ!

少しく間をおいて、我家の周囲を睥しながら 何で?俺の父は、こればかりの土地と財産とを遺して死んだのだろ?

親しい教授、多くの友達らは、皆んなああして文化の街頭に、行かを高唱して楽しく叫喚えてゐるのに、それに今の自分の悲りはどうだ?

お母さんやしげるの半分も努力が出来ないでそれで不満足だとは……………。

哲、かく唸ながら縁側に腰をかける、同時に傍らの手紙の方を見ては深い沈思をする。この時哲の書齋で何かを讀んでゐた、相知四邊を遠慮するうな足で哲の背後から聲をかける。

相知 (一寸姿のいえず、何處となくヒステリカルの表情、二十六七歳處女らしくない態度、

哲

未婚者。哲さん!随分お骨がおれて? (幻覺から覺めたる如く。)

はあ、なあにやつてみれば、人間には何でも無いが、しかし僕の現在には、殊に労働は。

相知 さうかしら?私がお宅へ来てから何んですか急にお百姓!といふものを強く感じられました、そして私の自然の執着性が、その哲さんの足許の土の中から掘り出して見たい? け

ぞ いえッ、僕の足下から土から——現在から?

相知 ……………。六年間の私の辿つて来た仕事?は一體何のために?私を本當に育て、くれたものでせうか、安らかな生活をあたいて下さ

つたものでせうか、私のことが分りません。(淋しく笑ふ。)

さうですかね、あなたのお仰る本當の生活?とはどんな意味のものですか、言つてごらん

相知 私の生活?これまでのもの、?それは私の愚痴なセンチメンタルに過ぎないわ。

哲 二人、沈黙して、互に前庭の地面のあたりを見てゐる。  
の家にた出になつて、もう幾日？

相知 さう一週？間になりませう。直ぐ歸るつもりでしたのに、大へん永くた厄介になつて。なに！そんな遠慮はいりませんですからなるべく何日まで。

相知 私、教員をやめましたら、何んだか自分の心持が變つたやうに。

哲 はあ、だけと相知さんが、先生！でしたのは學童の爲めにも父兄のためにも、どんなか幸福だつたか？と、僕には信じられてなりませんね。

相知 そんなに、上げられると恐縮ですわ、私！差支ひながつたら、當分た宅に世話になつて百姓を習つてみたいと思ふのですが、空想でせうかしら？

哲 百姓？相知さんが？

相知 百姓、相知の顔を凝視して主観的に百姓なんか成ればしませんよ、労働といふ

りに矛盾が多い、學問及學問の意義が混同してゐる、學者と教育の態度が不徹底極まる。といふ主論でそれを擔ぎ出して現代へ宣言したい。だけと神聖の職業者だけに、餘程考察してかゝらねば自己の主張がくづれてしまふ故に初めから純正な冷靜な批判を、社會の識者義人に裁きをうけて、其上乗り出した。それにはこれらを真に味ひうる正義な仲間を欲しい、ので、僕にも實は加勢して呉れられないかといふ、交渉なのです。

相知、強く自己を回想し、懺や懺悔の表情から漸次光明的にうつる

相知 さやうですか、私共もいつかそんな議案をたてたことがあります、弱小學教師の仲間では、お流れになりました。多くの若い青春の所有者が！で私などは一番不幸な人間でしたから、視學や校長の懇請もきかないで、辭めてしまつた理けですわ。

やつは、皆んなが一圖に考へてゐる單純觀を排斥しますよ。

第一に全體のこれまでの習慣上、あまりに自分を虚偽してゐる、そこに眞實の力！

さういふ經驗が足りない、從て個性の實在を疑はれる、認識が危ぶまれる——自然の前に出でるには、あまりに輕々しい行動なのが、近代人の心です、いまの私をごらんになれば、よくた解りませう？

相知

相知 .....  
いつそのこと、此等の些しばかりの父の土地

家屋など潔きよく姪だちに呉れて、私一人あゝした友達の渦中に逆戻りしやうかと、躊躇してゐる時なんです。

それには、丁定宜え時が到來してゐるのです。

哲、期待的に側の手紙を取り上げて、早讀す。

つまり、教員たちの生活運動が始まつたんです。この友達は（手紙を指して）大阪の或る私立専門の教師ですが、從來の教育制度は餘

哲

（悲痛的に相知を直視して。）

あなたの言ふことは儘かです。而し僕等の友達には、あなたのやうな思ひ切りの悪い人間ばかりなのです、教育者の資格のない民衆自身よりも劣性な人間なのです。さうでせう、教員の癖に無暗に現在革命を謳歌して喜んでゐるのではないのですか、开ふ言ふ僕も、やつぱり往生に迷つてゐる一苦惱者なのです。二年此方、父の古屋に五反歩の耕作者として、新歸化の田園生活者として、小作人の味方として自認し、老つた母、無智なしげるを相手に暮して來ましたが、それで何一つ僕達の小さな現在には、環境には自然性は自由性は、見出されてゐません。

でよくよく僕は自分といふ者の眞價或は態度に就て内省してみました。併し、それはみな無駄な空我な企てでした、ある心の出來得ない反映の影象を模擬するに過ぎませんでした。

で、僕は、何うせ田舎に斯うやつてゐたどこ

ろで、此等の苦しみを脱腔することが出来得ない、自然人に成り済ましたところで、眞の偉大なる還元者とは到底爲り得ない、自由人の意識をそのまゝに體驗することは餘りに空謀な自欲でした、何所にゐても役に立たない人間たどしますれば、いつそ母もしげるも置去りして、彼等の激動の中へ歸つて混りた  
い！  
んです、それが私の或る一方を發見？して  
れる得策になるんだかも知れません。  
相知さん！未婚者のあなたに、恚麼泣ごと  
を溼すのは男らしくないね。

相知 哲さん、さうすぐに充奮しては、不可ませ  
ん！  
相知反感的に、哲の亢奮せる顔を見ながら言て微笑す  
る。

哲 僕が、留守でしても、相知さんだけは、お寛  
り！  
り！

相知 哲さんのお不在には、失禮しますわ。

哲 相知さんは、今自由のお身境でしたね、何う

でせう、一緒に大阪まで？

相知、一寸逡巡の態、稱々冷靜に。

相知 お可笑しいわね、しげるさんの人と！

哲、緊張した態度で。

哲 开磨ことは、僕達の理性の確持者には、適つ  
てゐやしませんよ。

相知 でも、他から誤解されると、私よりか、母  
さんやしげるさんに、お迷惑ですから。

哲 大丈夫です、お母さんは、私のことは何ん  
でも守つて下さる人ですし、しげるはあゝした  
自然人？ですから。

相知 併しごちらにもお氣の毒ですもの。

哲、此の時、熱情的に相知に寄り迫る、相知それを輕  
く除ける態。

哲 僕達は、今二人や抄しばかりの土地に囚れて  
ゐる時でないのです。

文化は僕達を待つてゐる、全能！を人間を、  
世界を、満足する爲に！ね、さうして一所に  
行つて下さらない？

相知、や、主観的より醒めて後、哲を見上げて。

相知 (涙を半巾で、ふきながら) 何處へでも行

きます、……その代り此の先哲さんを、  
兄さん？とお呼びさして下さらない、宜え  
せう？

靴の利那！つち畑の方から来り、太儀さうに二人  
る縁側に腰を卸す。

六十以上、背の高い青白い顔、亡夫後六年、共に破  
産後の田圃を維持す。

つち 何を爲てゐたのかえ？お母さんにばかり種  
播さして。

哲 なあに、今朝の手紙を読み反してゐたので。  
つち 手紙をいふのは、そんなに何遍も讀まなく  
つては、分らないのかえ。

哲 殊に今度の手紙は用事のあつたものでしたか  
ら。

つち 一般的な用？

哲 今度大阪の友達が、或る仕事を始めるので是  
非私にもすけてくれつて、のことなんです。

つち 何んだつて？大阪まで飛んでもない。

哲、落膽的に一寸、相知の方を睨視しながら眞面目に。

哲 一概にさうお仰られても困りますが、早いこ  
とは、教員達の生活運動が起きたのです。夫

れで、少しく入手が足りないから、都合で、  
私にも後援して貰いたいといふ頼みなのです。

つち、益々不安な表態に變る。

つち お前は、もうちやんと教員を止めたくせに  
今時そんな仲間に、口を出さんでもいえでは  
ないかえ。何も屈托しないで、家にさい落ち  
付てゐればそれで澤山ではないかよ。

哲 でも、私の友達は何、至高な天職に任じてゐ  
ながら、それに代るべき認價が現在皆無なの  
です、それに就ての要求なのですが。

つち いま時分、先生が一番樂で、月給も昇つた  
のに、それでも不足があるんだろか。

哲 その見方が、お母さんには違ふのです、現  
代は冷弊なんです、それで違つてゐるんです。  
人は只喰つてゐさいすれば……。

つち まあ理屈はよしてくれろな、人のことはせ  
うでも宜えから、た前さ家にてくれ、ば。

哲 ……………

つち おさいは、このきりごうも、心がそはく  
してゐるやうだが、(相知の方に) 向て哀訴する

やうに)よく我家のことを考へてくれるがいえ田を賣り山を失くしても東京へ送つたのは、何のためだえ。それでもお父さんがゐたら、少しは世間におて来てもらえが、も落ち着てくれなければ、お前の爲に、あどの五反歩も亡くなつて終ふ、こんなにお母さんも、骨折て働いてゐるんだに。

哲 しゃげるも、あゝして精出して働いてゐるのに、たまには優しい言葉でも、かけてやつたらどうだ。

つち 哲やえ！どこへも行らないよ。あゝぐづぐづしてゐると、日が暮れつちまあ！

相知 切角お母さんも、あゝと言ひですから、お出でなさらないで、居たら何う？

哲 哲、蒼白な顔、強度の近視眼を衰へた全体、取想的に自分が二年此方の實生活と信念の變化に就て主客何れにも對象してみた。

哲 あゝ！僕には何うしていいか分らなくなつてきた。

ゆきの (この時村の小學校からゆきの本包を抱へて歸る、そして二人の前に辭儀をする、臉には幾らか涙が出てゐる。)(哲の養女、八歳何もなく幼女の天真性を失つてゐる表情)お父ちゃん！あの、學校の友達が、皆んなで妾を遊んでくれないの、だけぞ今日の清書は級で一番だつて先生にほめられたからいえわ。

哲 なに！皆んなが遊ばないでも、先生にほめられ、ばいえよ。

ゆきの、家の中へはへる。續いてしゃげる、村道の下手の方から所用より歸る。片手に當日の新聞と其他の書信雜誌を持って哲の前に出し、相知には丁寧に黙禮する。

しゃげる 餘り背の高くない小肥りの全格、縮の筒類を被て、足には藁の草履を穿いてゐる、二十一歳。  
しげる 村で、配達を會つたものでしたから。  
哲 それは、丁度だつたな。

しげる 勝手口の方へ去る、相知再び書齋に入る。瞬間、新聞を投げて茫然自失す。  
夫れは、一昨日、俄に教育聯盟を大阪の中之島公園にて發會と同時に舊友の一派が檢束された事實を、詳細されてゐた。  
哲、無意識に縁側を隔れて、素足のまゝ、庭内を狂亂して往復す。

哲 やられた！たうたう！！

半端な教員の癖に、「権格と時間と資料」とを充分に與へたつて、畢竟彼等には、それで現實を満足されるか？  
彼等の熱望は反て自己を虚使する自暴自足の妄舉なんだ。  
教育者の本分は、大學教授を最高として扱はれやしない。  
自由の時間研究の資料最上の権利を要求して騒ぐ値打が何處にある？彼等の人道主義や自由主義の原則は、何を標準として、そんなに

自己を勝手に評價してゐるのか分らない、それが現狀に抗辯し祈求し争闘してゐる吐嗟の心理は、やはり彼等自身の破滅なんだ、社會本能の分裂なんだ。

併し、そういふて批難し逆視する舊友の俺の現在は何うか？  
「田舎者！無能者！凡暗」と彼等から蔑外されてゐるには相違ない、そして俺を無思想な小作人呼ばりをしてゐるのも限つて俺には知つてゐる。だが俺の今日といふ今日、現瞬といふ現瞬からは、彼等の自分から自分を高く値打附てゐる一個人だけの人間とは全然違つて來たぞ！

俺は最早、舊友のその天才を自負する奴等を少しも怖れないぞ、其麼友達等の前に、此方から頭を下けて仲間にしてくれ、些しでも俺の凡暗を友達の誼みで創化して呉れる、なんて頼んで行きはしないぞ！  
それに、何んで自分は今まで、そのやうに彼等のやる行爲を羨しがつてゐたのか、これし

きりの時代眩暈に生嚼つて、それで自分を勝手に苦しめてゐたんだそれを心附かないで来たんだ！

あゝ自分には最う、何も耶も要らなくなつた友達とも教授とも絶交せう！

俺の現瞬の一切の斷念が、慈しみの母と無智のしげるの言葉と、五反歩の永しへの耕作者として唯一の貧乏な村の小作人の一人として力も愛もその土の中よりいだすことが出来るんだ！本當に本當に！  
あゝ！……俺は寂しい！

哲、絶叫すると共に、突然地上に辛倒す。つち、しげる、ゆきの、相知等走せつく。

折から村の若き男女五六人探蕪の歸路に通り合す、傍の見順れない、相知を集視してゐる。

しげる (哲の痙攣する兩手を把つて) 久しぶりで野良に出たから、そんで眩暈したんだよ！

村の若き男女等

哲さん！に畑の仕事なんか無理だんべえね。學者だものさ。

附近の炭坑の五時の汽笛鳴る。

陰うつ場の場裡に——幕

(二二二六作)



## 大地の搖籃

(創作)

加 茂 勝 夫

あらゆる生物が此の地殻を破つて萌え出やうとする早春の或る日のこと、一點の陰翳も無く晴れ渡つた蒼空には、無限の透明さとあたゝかみをたゞへて、午後の陽がやはらかく大地のうへに遍照してゐた。

彼はいつものやうに東臺の杜の一端、新しい大きな切株のうへに腰をおろして凝乎と思索に耽つてた。

彼はその頃よく休日には、彼の愛讀する哲學や宗教や文藝の書を懐にしてそこへ行つたのであつた。

彼は其の頃外部の壓迫がかなり激しかった。或る事情から自分の心がめちやくちやくに破壊されるまでに苦しまねばならなかつた。彼が文學的敏智の閃めきは、其の外部よりの壓迫に刺戟せられて、内部に潛む偉大なる魂の爆發であつたかも知れぬ。

兎も角、その頃自分のこの、生活について、いろいろのことについて考察された。臨川や御風の還元的思想と自分達の生活を究意して、いつにない純な心に甦つた。

けれどももうその思想の流れが同じやうに都會文化刺戟に耐へ得られないで、田舎の地に逃避して現代文明の羈伴から脱却せやうとする、テイレットタントの言葉だと知ると、或る意識がしみじみと、彼の心の奥にせまつて來たのであつた。然して、眞に純朴な此の土の中から生れて、小兒のやうな純な心に芽じまされた、人達によつてなされた言葉では無いと云ふことに、どんなに多くの淋しみを覺へたであつたらうか？

天地の奥の出入に節を合せて萬物の柏子に乗つて働いて居ると云ふ、眞の自然人の間から斯うした言葉

を聞くことの出来ない郷愁さで一ばいであつた。それは都會の文明の煩瑣に耐ひ得られないで土に還つた人によつてのみ叫ばる、言葉で無く、眞の郷土人の間に淺薄なる文明の肯定をあざ唾ふ、野の人の間にさういふ叫びの聲を擧げる人の無い悲しみにおそはれたのであつた。

彼はさうして、いつもさう云ふ純朴な郷土人の心に芽じまれた藝術家の出現など、云ふことを幻に描いてそれを夢見て居た。そして藝術の理想郷が、自由と不滅と青春と歡喜との天地の間になさるゝ創造にあるなら、都會文化に束縛された、あのジメジメとして混濁せる彼等の世界を此の我々の手によつて破壊しなければならぬことも考へた。兎も角彼は自然を相手として働き、そのなかに抱擁せられて生きて行く、この幾百萬農民の生活を研究して、そのなかゝら何者かを感受して、偉大なる或るものを發見しそれを表現しなければならぬと考へたのであつた。彼はもうさう考へるといつものやうに平凡に生きて行くことが出来なかつた。我々の生活の一時一瞬も潑刺とした生命の香に浸つて、やがて偉大なる藝術を創る可き根本基調となる可く生きなければならぬと思つた。さうして新しい開拓者のやうなうぶうぶしい全感情が、彼の小さき魂の世界を揺り動かして其處から離れた。

彼は其の幾日、薄す光る、唐鍬を持つて其の伐り倒された杜の一端に佇立して居た。

樅や栗や樺や櫻の大木の切株がすらりと並んで、木の葉がボクボクに腐蝕したやはらかな地の上に、白く乾ききつた木目を見せてすくすくと世紀を語る怪物のやうに露はれて居た。西側の一方にはまだ伐り残されてある、山櫻の古木や樅や椿がこんもりと茂りつづいて居た。其のあまりに剛直な樅や椿の葉は春の光に一枚一枚すべてが微妙なる光澤のひらめきを見せて、なごやかな空氣の流動と光の錯轍にもつれ合ふて居た。

「さうだ俺は此處を開墾するのだ。俺が新しい藝術を開拓する第一程として先ず自らの未開地を開墾し

なければならぬ。俺は此處に未だ何人も耕さざる新しい地を求めて、最初の理想實現の第一歩を踏出さねばならぬ。此處に新しい園圃が出来る。まんなかだけは蔬菜園にして、グリーンピーキャベツチエやポテトを植へやう。周圍には梅や柿を植へ付けて大屋からの道の兩側には巴丹杏を植へることださうして此處への道條を——西洋にある、或る田舎家の風趣を思はするやうな、青白へ洋的な花で一ばいにしてやう。それから、あの小さな巴丹杏の實が眞紅に色づく七月の頃や、大きな峰屋柿の葉の散りつづいた十一月の頃、霜の朝の冷さに木の枝から柔き探る悦ばしさを考へたとき、もうちつとして居られなくなつたザクリザクリと處女地へ唐鍬が突きさされた。くろぐろとした豐滿な土が、無限の重量を泡立たせて、こんなと彼の足下に盛りあがつた。新しい地の香がブーンと彼の全神經を甦らして、開拓者のみに味はふことの出来る大きな感激に浸つて動いた。

やがて掘り返された土は、さんさんと降る春の暗い光を吸ひとつて、白く乾いて行つた。彼の背後にはたくさんの木の根や草の根がどこころに渦高く積まれて、その草の根には白く、ちよつぱりと新芽が萌え出てゐた。

「この地のなかには一冬の忍従に耐へたすべての生物がやがて来る可き更生の春を迎へんとして、無邪氣な微笑と根強い執着を見せて居るのだ」彼はその一本を手にとると憚んなことを云つた、それから毎日開墾をつづけた。

もう百坪ばかりの田畑が出来て居た。五尺も廻らうと云ふ櫻や樅の切株はごうすることも出来なかつたが、小さい木の根株は、深く掘つて引抜いた。

或る日であつた。彼はいつものやうに、働き疲れたとき、残された樅の切株に腰をおろしていつものやうに思索に耽つた。

『此の多くの畑、こんこんとおひ繁れる杜、これらのすべてはみな人の所有のものである。』

然し彼等のうち、唯一人この風景を所有するものではない。地中線のなかにはあらゆる部分の全きものに就て観ることの出来る眼あるもの、他には他人の所有せぬ一つの財産がある。斯くの如き人は詩人である』と唯かが云つた言葉を思ひ出して。此の大地に潜むあらゆる無形の想像を心に描いて見たりした。それは何と云ふ幸福な瞬間であつたらう。

なだらかに續いた麥畑には、あをあをとした麥の新芽がやはらかに伸び立って畦間畦間には、やはらかい光の波と陰翳とをつくつて居た。遠くそれら一面の地平を見渡せば、春の大氣と下崩えの生熟とにゆきたたつ陽炎が、さらさらと燃わあがつてゐるのが見られた。

彼がさう云ふ謙虚な心持に法悦的氣分に渡つて居たとき、幾百年と無く繁り續いた杉の古木の山麓然と空を摩してゐる、鎮守の村の方から、一人の異様な、人間が歩いて來た。

その歩みは一種異様な何物かを深し求めて居るやうな妙な歩みであつた。麥畑の畦間畦間をトポットポリと、彼の方に向つて歩いて來るのであつた。彼はそれを見出した瞬間、何奴だろうと感じた。それはほんの偶然に彼の感覺を呼び覺ました。その麥畑を歩むものは、質朴な野良着の姿に薄光る金具の鍔を肩にして畦間をさくさくする百姓か、さもなくば樺色の獵服に身をかためて小銃を持った獵夫達で無ければならぬ筈であつたから——やがて其の人はだん／＼こちらへ近づいて來た。その異様な人間は、役場吏員ともつかず、小學教員ともつかず、ほん／＼と妙な格形をして居た。

やがて彼の前に近づくと突然斯う喋り出した。

「開墾かね！御精か出ますね。」

それは中年輩の一紳士であつた。その品のある面長な顔には貴族的な微笑をうかべて、彼を視おろして居た。然し其の薄笑が彼には何となくは氣が喰はなかつた。彼は沈黙して居た。紳士はあつげにこられたやうにポツテンとして居たが、急に何者かに怯へたやうに、彼が拾ひ出して置いた小石の塚を崩しはじめた。

其の柔いハンブルな白い指尖に、土にまみれた小石小石の一つ一つを掻き散らして、その中から赤褐色の小石とも何ともつかぬやうなものをたくさんみ出した、そのうちから一つ大きな土器のかげらゝしいものを取り上げて凝乎と視つめて居たが、『フンこれもさうだな』と獨りうなすいた。

『え！何するんです、そんなものを拾ひ出して』彼は突然近よつて訊ねた。

『けれども今度は紳士の方が黙つて、その欠片の一つ一つを集めて居た。何者か或る偉大なものを發見したごさのやうに、その瞳は異様に輝いて彼の前にそれを差出した。』

『君こりや古代の遺物だぜ！』どうも驚いたと云はぬばかりにそうブツキラに云ひつた。

『えッ、そんなものが』

『そうさ、これが三千年前に使用した土器の欠片さ。僕は此處へは始めてだかこんな えものが見つかると思はなかつたね！此處も古代の遺跡地だよ』

その紳士は彼の前に、其の風呂敷を投げた。その中からは新聞紙に包んだ赤褐色の土器の幾片かが集められてあつた。其の數ある中から一つの平つたい石を取り出して彼に説明した。

『君これは石貨だよ、古代の貨幣だね。こゝには随分古くから人間が住んで居たらしいのだよ』

『さうしてわかるのです』

『僕は考古學を研究する學者さ』これが三千年前の人間が使用した器物のかたはれなんだ。未だ縄目のあどがまた残つて居るよ。古代には繩をもつて型をつくつた形跡があるんだね』

『それぢや繩を撚ることは随分早くからあつたんですな』

『さうらしいのだね。まあゆつくり研究すれば面白いことが見つかるよ。よく注意して見給ひ。矢の石など視つかるかも知れない。人間は土から生れて土へ死んで行くのだからね！』

土のなかから面白い研究材料が見つかるよ』

「つ、いつ！土から生れて土へ死んで行くんですぞ？」  
 「君達にはわからないね。人間は人間から生れるのだからか、死んで行くときは土だよ、土はすべての原子なんだね。人間が生きたることは土からすべてのもをどるることだよ——然し土のなかに平等の腐蝕と沈黙だけさ。三千年前の人間の姿は見出すことが出来ないが、そのうちの或るものは見出すことが出来るね。まあ君達のやうに何にも知らないで土にこびりついてゐるのが一番幸福だよ」  
 その紳士は斯う云へ切ると、その小石の片々を兩方ひ風呂敷に包んで、すたすたと行つてしまつた。彼はその後ろ姿を見おろして、しばらく動かなかつた。

「お、彼こそ三千年前の生活を研究する考古学者だと云つたな。さうだ俺は此の土地を幾回掘り返し、掘り返してもそれを見つかることが出来なかつたのだ。唯俺は此の土を掘り返してゐるへすればよい積りでやつて来たのだ。種子を蒔いてはやがて充實の日に刈り採つて、それでいへ積りでやつて来たのだ。」

あゝこの黒々とした豊満な土、人間が此の土に生れて、耕作し、收穫し幾千年代のむかしより今日まで我等祖先より祖先へ傳へ傳へて、耕生より收穫へ——生より死へ、無意義な人生の展開が永遠に續いて来たのだ、否幾千年萬代斯うして生きることが續かうとするのだ。然もこの土のなかに古代より今日まであらゆる人間の争闘——愛も憎しみも呪ひもそれら一さいのものが植へつけられて来たのではなかつたか——さうして時と云ふ空間の流れはそれを永遠の過去に葬り去つて来たのだ。俺が斯うして考へて居るのも一さいが土の中に潜む靈魂の反映では無かつたか？さうだ俺は今俺のはんたうの姿を見出すことが出来たのだ。或る多きな力を開拓する鍵を彼奴に與へられた。俺こそは大地の精靈をあはく永遠の若腦者になつて見せるぞ。彼は斯う叫んだとき、彼の全身にははちきれさうな創悦の力が彼の魂をすつかり把握してしまつた、さうして永遠不滅の想象が其の一時に於て彼の心に植えつけられて来たのであつた。

(此の原稿は私の今書いて居る長編小説の上編「土に芽む心」の一節である)

一一二二二四日作

### 郷土思想自由公開欄規定

#### 一、寄稿に就て

郷土建設新人及郷土主義思想家一般の自由な作品及發表の件は、編輯局で精細に選別します。これは一寸潜越な其人を侮辱しない行爲のやうですが、妥當しない主張や合理的な思想は「本社」の態度によつて「解る苦」で採りません。それが價値のあるものと認めました場合、本社の方に及ばない時は、他の知名の所へ持廻つて更に批判の勞をさるつもりであります。

各人の研究及他の要領等については、種類を立てません、枚数も制限しません、本社の精神に背馳しないかぎり、夫等の完成をばかりします。都合によつて、本誌に登載した分には、普通稿の原稿料を、差上ることにしてあります。原稿返戻の方はその郵券を必ず送つて下さい。

#### 二、一般投書者へ

讀者諸君の自由な作品欄を設けます。これらで多くの雑誌の文藝懸賞の遺方では、本當の個性を見るこが出来ません。故に本社は新らしき方法を以て、郷土愛護の精神から流

れ出た、眞實の力！其の姿を代表する作をお互に尊重してお互に之等の純實を鑑賞し批評することにしたいものです。  
 そんな理由から本誌の各欄には選者を配置しないことにしました、さうして無暗に、不眞實な作文や無根據な思想は、お断りします。二、三回以上本社編輯局に於て、特に認めました時は、其の人の優秀性を紹介と同時にその作を本誌の中央欄に載せて、他にまた表賞かたを講じます。

#### 三、意志解放特設

地方愛護の土及郷土有志の人達が、自己の意見や慨嘆を抱へてゐながら、これを他に發表する方法を知らない焦慮してゐる方や、炭坑生活者小作農業者などの人々が、自己の希望を自由に叫び得られない方は、通知して下さい。直ぐに本社から後援して其等の事項を正當に、文章にて發表するなり言葉にて交渉するなりを、引うけますから遠慮なく報告して下さい。

#### 四、研究及質疑

一般地方政策及郷土精神運動、純文藝に關し

ての協議に應じます、また相互に其等の研究に就て諮案いたします。また、現代人的苦悶者或は身境の不安なる人乃至零落の方はお出で下さい、及ばずながら助けあつて、交響いたす考へです。

#### 五、編輯雜件

寄贈雜誌新聞書籍、地方出版品類發行の相談本誌廣告に就ての問合せ、其他一切の事項は本社編輯局宛に、通知して、いただきます。

### 郷土人自由作品規定

(締切毎月二十日)

作品種類	
論文 (評論及紹介) 廿字語字行以内	感想 (書翰及小品) 廿字語字行以内
創作 (小説及戯曲) 廿字語字行以内	長詩 (新) 休十五行以内
短歌 (新) 派五首以内	
投書規	
一、投書は各篇一人一種つ、全部二に亘つてもよし。	
二、用紙は自由、短歌は官製ハガキ	
三、書体は楷書假名は平假名。	
四、書明記は郷土社編輯局宛の用件	
五、原稿は郷土社編輯局宛別封の用件	
六、一切無用紹介はすべて返信付	

編輯を了して

◎大正十一年十一月三日、諸根樟一氏の郷土自由學堂の會合にて、斯うした仕事を實際にやつてみたい運動を起してみたい、といふことを私達は語り合ひました。愈々それが本當になつて具体化したのが「郷土文化」の生命ですが、餘り急な企て、したので、随分骨折して漸つてこれまでに仕ました。

◎蓋し、日本には始めての驚異すべき新ザナリズムの運動―郷土教化の再興―民衆精神の發足として壯き私達の意氣の前には、何物の恐怖がありません、併してこの出現が日本の村及村人の新生の心に、沸き溢る思潮を投入しないではおりません。

◎眞實の郷土人は、これまでの社會の多くの思想宣傳者や知識業者によりて、或は無健全な出版物によつて、何れだけの自力性を傷けたか、またそれらを讀む人聽く人にこりて

も決して過ちのないことでは、なかつたと思します。

◎郷土人よ！ もはや私達は、いつまでも、そんな場所の間諜着てゐる時ではない、これまでの社會や都市や文化を氣取る人には、皆己に頽廢した骸だ、塚だ。

それらを今、私達の郷土から根本に發掘して新らしき土に反して此方から、生れ替らしてやる時である、人間には故郷を持ちたくない者は無からう。

せば彼等もまたやはり皆郷土人の仲間だ同胞だ！と思ふのです。

◎これらの私達の主張が、一切を撤生した所に世界があります、目的があります、其後において私達の實在が造られて行きます。

私達は、決して、雜誌だけの仕事ではありません。

もつとく大きい意味を抱へてゐるのです、自然の兀々した眞裸身のまゝで、東北の一隅より生れ出でたばかりの自然人の手です、日本の兄弟等よ！ 早く來て、私達の温い手を握つて下さい。

(一一二二八日)

謹賀新年

民衆の健康に『郷土文化』の光輝を祝す

大正十二年一月一日

福島縣石城郡内郷村綴驛前

旭日生命保險株式會社

福島支社監督所長

植田傳太郎

業務一般

信念 奉仕

東京日本橋旭日生命保險株式會社の保險契約の一般を絶對責任附を以て取扱ひ致し候  
社則及内容又は契約の希望者は、御一報次第參上致す可く候。  
人々が、保險を有たざる時は暗夜行路に等しき状態に御座候。況して社會苦多端の現實に於て、如何なる人間愛を標榜した奉仕の誘益に與かるとも、自己の努力より得たる貯蓄、より偉大なるものは他に有之候や？  
不肖茲に感あり、往時の醜惡式欺誘制を避けて、新らしき共同及共善主義の下に、相互の人生に誓て奉仕する所以に出でたる者に候。



右誌代は總て前金拂込のこ 郵券代用は必ず一割増のこ 海外は支那を除き郵税一部十錢のこ	本	一册	一月分金卅六錢 郵税共
	誌	六册	半年分金二圓同
特別號は價格不定に就、前金拂込 の方は其前金より計算す。	定	十二册	一年分金四圓同
告 廣 特 等 表紙二三面一頁金五拾圓 中 等 四五面内一頁金參拾圓 下 等 半頁割込隨意不 定	料	大正十一年十二月廿日印刷 大正十二年一月一日發行【禁轉載】 福島縣石城郡川部村沼部四八番地 郷土社編輯局内 編輯兼發行者 作 山 喜 福島縣石城郡平町一丁目廿九番地 印刷者 坂 本 隆 藏 福島縣石城郡平町一丁目廿九番地 印刷所 株式會社平活版所	發 行 所 郷 土 社 福島縣石城郡平町南町四五番地 同縣同郡川部村大字沼部四八番地

# 謹賀新年

大正十二年一月一日

新興郷土の勞働を高調し  
民族本義の精神を讃ゆ

磐城勿來局區川部村

安島民次郎

澤村藤一郎

福島縣石城郡川部村

大日本炭礦株式會社東海礦

片寄組

組長 片寄兵吉  
書記 太田武

業務一般

優良坑夫採用、礦區踏査及賣買紹介  
坑木及坑木山仲買、木材及屋根瓦周旋

## 新らしき年の生活を迎ひます

「郷土文化」の創刊を祝し

郷土人の多幸を祈る

大正十二年一月一日

——勿來海岸旭日の前にて——

磐城窪田町(勿來驛區)

荒物砂糖製粉、諸油類各種  
萬金物疊表、板硝子陶磁器  
乾物雜穀木炭、其他雜貨

叶屋繁之助商店

電話(勿來區八番)  
電界(キ)又ハ(キタ)



# 恭賀新年

「郷土文化」の創刊を祝し  
郷土人の幸福を祈る

大正十二年一月一日

磐城國窪田

吳服商 **刃田口佐平商店**

振替東京 五一五五五  
電器(タケ子)又ハ(夕)  
電話(長) 四番

「郷土文化」の創刊を祝し  
郷土人の向上を祈る

大正十二年一月一日

磐城國石城郡植田町

度量衡器  
計量器  
新聞雜誌  
和洋菓子

小宮山皆吉

電話五九番

# 謹賀新年

大正十二年一月元旦

却説我々等は商戦休養時代に於て我商店營業は他府縣より多大なる委託品を輸入し市内の商人に販賣し、物價調節之意氣に依る目的なり委託者の口錢は鮮魚賣上金八歩塩干煮魚等は六歩にて親切至誠を旨として主意兩養の店則に依りて勤め營業を罷在る者なり、況して御小賣は平等にて販賣申候間御愛顧之程願上候。

外に尾洲半田三〇印清酢平製氷株式會社の特約販賣部に相成り居る故に多少の注文御一報被成下度勉強廉價が我店の旨意安心して御取引被下度候御小賣の値印は時價により違ふ故に來談を乞ふ。各地方の御祝儀並に不祝儀魚類入用の節は客本位に勤むる故是非御來店御試買被下度候 草々頓首

磐城平町四丁目

伊藤彌兵衛商店

登録商標 **卜** 海産物委託問屋 尾洲三〇印 清酢海岸線一手賣捌所

平製氷販賣部 諸罐詰御小賣

電話五二八番



民族象徴の「郷土文化」創刊を祝し  
民衆齒牙の健全を祈る

大正十二年一月一日

齒牙治療

義齒金冠

口腔外科

一般

齒科に関する研究及其他の口腔事項に就ての  
お質疑は何時でも喜んでお應答します

福島縣石城郡平町田町

森合齒科醫院

院主 齒科醫學士 森合芳男

# 謹賀新年

郷土文化の刊創を本日祝す  
郷土人の健康と幸福を祈り  
大正十二年一月一日

診察時間 往診 午前午後

# 丹羽病院

磐城平町南町 (電話二二九番)

外科 花柳病科 院長 丹羽修輔

内科 醫學博士 松村茂秀

小兒科 醫學士 稻野實

産科 醫學士 中山立三

婦人科 醫學士 佐藤武司

レントゲン (X光線) 科 技手 梶本廣太

◎施療毎週火、木、土曜日  
◎博士診察は毎週火曜日  
◎第二病室増設(公會堂角)  
電話二六七番呼出

入院隨意

MOROHASHI'S  
LIBRARY  
IWAKI TAIRA

徳拓代多院

31.OCT 1927

大正十一年十二月廿九日納  
大正十二年一月一日發行(毎月一回)本

輯壹第 化文土郷 卷壹第

# 年 新 賀 謹

り 祈 を 壽 長 の 族 民 國 帝  
す 祝 を 福 幸 の 土 領 本 日

日一月一年二十正大

東京・日本橋

旭日生命保險株式會社

電話本局 特長一八三八番  
三九九四六番  
振替貯金口 東 三三二五九番

福島市茶町廿四番地



## 旭 日

生命保險  
株式會社

## 福 島 支 社

正七位勳五等

福島支社長

園 部

卓

電話 七三三番  
振替口座東京二五二七四番

(本誌定價金參拾五錢)

Y 21027

版 出 社 土 郷